

大坂城下町跡 I

—扶桑道修町ビル建設工事に伴う発掘調査—

財団法人 大阪市文化財協会



ごあいさつ

商いの町としての大阪は、豊臣秀吉による大坂城の築城を出発点とするといえるでしょう。以来、大阪は、大坂の陣をはじめとし、近くは第2次世界大戦まで、幾多の災いに見舞われながらも、その度に復興し、日本の政治・経済にあって、極めて重要な位置を占めてきました。

この商都大阪にあって、代表的な町、道修町の一角で発掘調査を行いました。地下からは、日本の国内はもとより、世界各地からもたらされた品が数多くみつき、かつての繁栄のありさまを現代の我々に伝えてくれます。城下町大坂の一端を紹介すべく、本冊子を刊行いたしました。

なお、大坂城下町遺跡の発掘調査にあたりましては、扶桑薬品工業株式会社の格別の御理解と御協力を得ましたことを明記し、謝辞にかえさせていただきます。

財団法人大阪市文化財協会

理事長 佐治 敬三

はじめに

大坂城が築かれた上町台地とこの周辺は、5世紀の頃にはヤマト王権の倉庫群がおかれ、7世紀の後葉から奈良時代には難波宮が営まれた。中世には大川の岸の渡辺津が賑わい、16世紀の中頃には一向宗の石山本願寺と寺内町が栄えた。このように、大坂城の一帯は時々の歴史の中で、政治・経済の要衝の地であった。

現在の都市としての大阪の直接の出発点となるのは、1583年(天正11)から始まる豊臣秀吉による大坂城の築城である。1590年(天正18)には秀吉が天下を統一し、大坂の町は日本の中心となり、繁栄の一途をたどる。1598年(慶長3)には三の丸工事が始まる。これに伴って、東横堀川以西の低地、船場の開発を行い、城下町の拡充を計る。この結果、大坂は城を中心とした、東西約3km・南北約2kmの広大な町となる。大都市＝大消費地となった大坂には、日本国内はもとより、世界の各地からいろいろな物資が運ばれてきたことが発掘調査でみつかった品々からうかがえる。

巨大な都市として繁栄した大坂も、1614・15年(慶長19・20)の大坂の陣の戦火によって焼け野原となる。いっさいのものが焼け、埋もれてしまったが故に、発掘によって、焼ける直前のようすを知ることができる。

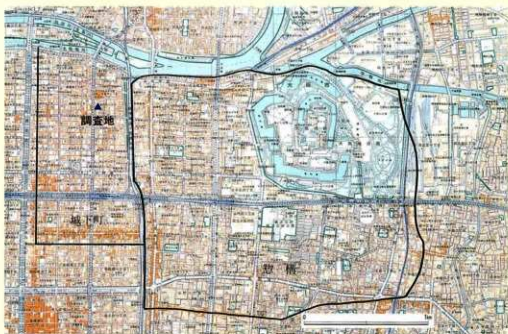
10数年にわたる発掘調査によって、1583年から大坂の陣の1615年までの豊臣氏大坂城の時期を、1598年の三の丸築造を境にして「豊臣前期」と「豊臣後期」とに、私達は区分している。さらに、1615年以降、17世紀の中頃までを「徳川初期」と呼んでいる。

調査地は江戸時代以来、薬の町として知られる道修町(1丁目7番10号)に位置する。これまでの周辺の調査によって、地下には大坂の陣の焼土が残っていて、豊臣後期の城下町がそっくり埋まっていることが判ってきている。また、東方100m程のところには、豊臣期から1622年(元和8)まで、魚市場があったことも発掘調査によって判明している。

建設工事に先だち1992年1月から5か月間、約700㎡の調査を行った。



1 調査地全景(南西から)



2 調査位置

焼土層(大坂の陣)

豊臣後期

洪水の時の砂層

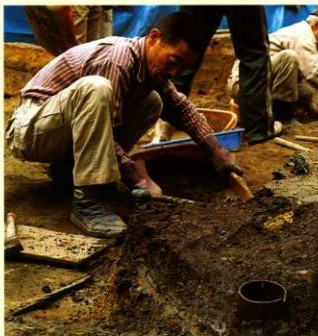
谷の埋土(上層)

谷の埋土(中層)

谷の埋土(最下層)



3 地層のようす



4 瀬戸黒(16)出土状態



5 大坂の陣の焼土層から出土した焼物



6 徳川初期の焼物



7 同じ穴からみつかった焼物(徳川初期)



8 美濃産の焼物



9 備前焼(豊臣後期)



10 織部焼(右手前長径14.3cm)



11 鼠志野大鉢(長径29.0cm)



12 中国産四耳壺(高27.0cm)



13 唐津焼四耳壺(高26.0cm)



14 備前焼(高19.8cm)



15 伊賀焼(高18.7cm)



16 瀬戸黒(口径10.3cm)



17 志野(口径13.3cm)



18 美濃焼天目(口径11.7cm)



19 軟實施釉陶器(口径10.2cm)



20 唐津焼(口径23.0cm)



ベネチアングラス

大坂の陣直後の塵穴からみつかる。
ヨーロッパと大坂が「海続き」で
あったことの証である。

21 ベネチアングラス(実大)



22 分銅「拾兩」(371g)



23 骨製品(右直径2.0cm)



24 朝鮮李朝産白磁



25 谷の埋土(中層)



26 谷の埋土(最下層)



27 人形の頭(残存長10cm)



28 木筒(徳川初期)

おわりに —発掘調査の成果—

城下町以前 調査地の北半には、東から西に向かって流れる大きな谷の南岸があった。この谷の最下層からは7世紀頃の土器(26)が、中層からは8～9世紀の土器(25)が、上層からは12～13世紀の土器がみつかり、谷が徐々に埋まっていったことが判る。また、中世の井戸が1基みつかり、城下町となる前から近辺に人が住んでいたことがうかがえる。

16世紀末、洪水の砂(3)によって、この地は平坦な土地になる。

豊臣後期 豊臣前期には未だ町としての開発はなされていない。

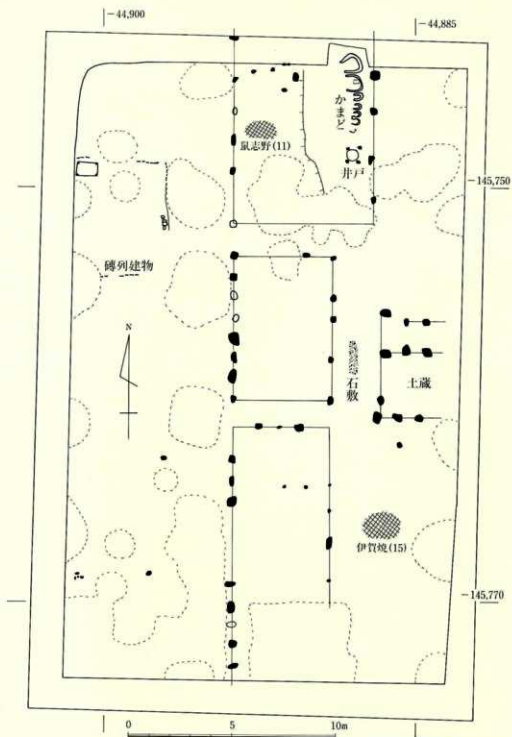
町としての開発が始まるのは、16世紀末の洪水の後からである。人の力によって土砂を運び入れ、何回もの整地を行っている。17世紀初めのある時点では、北半に家が建てられ、南半は塵穴や空地となっていたようである。塵穴から分銅(22)や人形の頭(27)、皮製の被り物のようなもの(31)もみつかった。

大坂の陣の直前には、右の図に示したように、建物の数も増え、10cm余りの厚さの壁をもつ土蔵や、碑を立て列べて基礎工事を行っている建物もある。

みつかった多量の焼物の中には、中国で焼かれた青花や壺(12)、朝鮮で焼かれた白磁



29 かまどの発掘



30 大坂の陣で焼失した屋敷

(24)もある。また、当時の最先端の流行であった茶の湯で用いられた器、茶碗(16~19)や茶壺(12)、水指(14・15・20)、向付(10)の類も目につく。

徳川初期 大坂の陣の直後の塵穴からガラス片(21)がみつかった。青いガラスの表面に白や赤、緑の色ガラスを散りばめている。その技法の特徴からイタリアのベネチア産であることはまちがいない。当時、日本にもたらされたガラスの実態が判る資料である。

本札に文字を記した木簡(28)もみつかった。東方に1622年まで魚市場があったためか、当地でも魚の名が多い。この中であって、表「たばこ正味七拾斤吉左衛門」、裏「たばこ七拾斤正味」とかかれたものがある。煙草は豊臣期にポルトガル船によって日本に運ばれ、慶長の頃から国内でも栽培が始まったとされている。これらの木簡は17世紀の前半に廃棄されたものなので、当時、急速に広まっていった喫煙の習慣をささえた、商品としての煙草の流通を知る貴重な資料である。

食器の変化 焼物の産地と形、数を地層ごとに調べてみた。唐津焼が豊臣後期に大坂に大量に入ってくると、美濃物の比率は下り、食器の主流は唐津焼となる。

最も一般的に使われていたであろう唐津の碗と小皿・大皿の比率をみていく。豊臣後期の地層からは、碗が83個、小皿61枚、大皿12枚が、大坂の陣の焼土層からは、碗60個、小皿66枚、大皿6枚がみつかった。大坂の陣の後、徳川初期の地層からは、碗が97個、小皿144枚、大皿20枚であった。豊臣後期には碗と皿の比が、ほぼ1:1であったものが、江戸時代に入ると皿の数は碗の倍近くなる。この数の変化は、豊臣期から徳川初期にかけての食生活の向上を反映しているのかもしれない。

(伊藤 純)



31 皮製の被り物(長径22.0cm)

〈参考文献〉

- 伊藤幸司「道修町出土の銅型とその製作実験」(『葦火』7 1987)
- 伊藤 純「大坂の陣の頃のうつわ—中央区道修町の調査から—」(『葦火』40 1992)
- 「大坂城下町のベネチアングラス」(『葦火』42 1993)
- 「いわゆる桃山陶器についての粗掃」(『中近世土器の基礎研究』IX 1993)
- 大阪市文化財協会『大坂城跡』III(1988)
- 『難波宮址の研究』第九(1992)
- 大阪城天守閣『城下町大坂—地中より今甦る激動の歴史』(1993)
- 京嶋 覚「東区道修町1丁目出土の皇朝十二銭」(『葦火』11 1987)
- 佐久間貴士編『よみがえる中世2—本願寺から天下へ 大坂』(平凡社 1989)
- 鈴木秀典「大坂城跡の豊臣前期と豊臣後期」(『関西近世考古学研究』I 1991)
- 「輸入貿易陶磁器の編年の検討」(『貿易陶磁研究』10 1990)
- 土岐市美濃陶磁歴史館『桃山の華 大坂出土の桃山陶磁』(1993)
- 松尾信裕「『道修谷』から道修町へ」(『葦火』39 1992)
- 「船場成立以前—考古学調査の成果から—」(『ヒストリア』139 1993)
- 松尾信裕ほか「大阪・大坂城下町」(『木簡研究』15 1993)
- 宮本佐知子「大坂城跡出土の秤と鎌」(『葦火』12 1988)
- 「大坂城跡出土の分銅」(『葦火』41 1992)
- 森 毅「『船場』道修町の発掘調査」(『葦火』5 1986)
- 「『船場』出土の木製人形など」(『葦火』12 1988)
- 「元和6・7年銘の木簡を出した魚市場跡の調査」(『発掘された江戸時代』1991)
- 「大坂で使われたベトナム製陶磁器」(『葦火』40 1992)
- 「江戸時代の唐物と和物」(『葦火』43 1993)
- 「豊臣期から江戸期にかけての船場の考古学的調査」(『ヒストリア』139 1993)
- 森 毅・豆谷浩之「船場商人の屋敷跡」(『葦火』42 1993)

大坂城下町跡 I

ISBN4-900687-03-0

1994年3月1日発行

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL 06-943-6833)

印刷・製本 岡村印刷工業株式会社

〒635-01 奈良県高市郡高取町車本215

(TEL 07456-2-2701)

